



### 漢方薬編

## Vol.6 広島市薬剤師会レポート

# 薬とうまく付き合って健康と安心を!

現代医療においては西洋薬とともに漢方薬が欠かせないものになってきています。漢方の正しい知識と特質、よくある質問を紹介します。

### 漢方薬と民間薬の違い

漢方薬と民間薬はどちらも生薬なので同じものと理解されているようですが、でも専門的には大きな違いがあります。まずは名称の違いがあります。ドクダミ・センブリ・ハブ茶・ハトムギ...といった、昔から経験的に使われてきた概して「種類の生薬からなるものを民間薬」といいます。普通は生か乾燥させたものが多いですね。それに対して漢方薬は二種類以上の生薬を、決められた分量で組み合わせで作られたものです。葛根湯・瓊玉膏・八味地黄丸・当帰芍薬散等のように「湯」「膏」「丸」「散」等の字が下につきます。ちなみに「湯」は煎じて飲む薬で湯液ともいい、生薬によって配合されている方剤のことです。「膏」には内用と外用があります。内用は生薬の粉末を蜂蜜に混ぜ込んだりした方剤です。「丸」は生薬を細かく砕いて蜂蜜などを加えて球状の丸薬にします。漢方薬の効き目が穏やかになり長期に服用するのに適しています。「散」は生薬を粉末や細末にして方剤とします。飲むのに便利ですが水分に溶けにくいので欠点すれば飲みにくさでしょうか。他に漢方薬のエキス剤や錠剤などがあります。エキス剤は生薬によって配合されたものを煎じてエキスを取り出しデンプンや乳糖に吸着させ顆粒や散剤にします。処方の種類が決まっています。お湯に溶けるので飲みやすいですし持ち歩きも便利です。錠剤はエキス剤や散剤を錠に打ち出したりフィルムコーティングをしたりして錠剤とします。味や匂いが気になる方にも薬に服用することが出来ます。

### 漢方相談室 Q & A

**Q** 漢方薬と西洋薬の違いは？

**A** 風邪の初期を例にとると、西洋薬の薬効は、粘膜に起きた炎症を解熱剤、消炎剤、抗ヒスタミン剤の複合剤(炎症の火消し)を用いて軽減するのであって治すのではありません。治すのは患者さんの自己治癒力に負うところが大きいのです。これに対し漢方薬は、外から身体が弱っている部分をねらって侵入した寒邪(かんじゃ)を迎え撃つ正気(自己治癒力)と戦うことで生じる寒気(さむけ)や発熱、頭痛などの諸症状を和らげると同時に身体を温めることにより自己治癒力を高めて治します。このように西洋医学での細菌、ウイルスは漢方医学では寒邪にあたります。また漢方では、患者の汗の有無は非常に重大でこれを見誤ると処方の選択を誤る恐れが生じます。

※寒気には悪寒と悪風の違いがあります。悪寒(おかん)は布団をかぶっても暖房を付けても寒気が止みません。悪風(おふう)は温かくしていると寒気はなく、隙間風に当たったりすると寒気がします。

**Q** 漢方薬は、身体にどのように作用するのでしょうか？

**A** 古代においては、食物と薬物の違いはどこにあったのでしょうか。話は石器時代にさかのぼります。狩りや漁をし獲物を捕る。うまく捕れないときには、食することの可能な草木皮を探す。そして食物から病気

**Q** 病院で薬をもらっているのですが、漢方薬と一緒に服用しても良いのでしょうか。

**A** 現在、病院から処方される薬は7000品目といわれています。インターフェロンを用いた肝臓病や癌(がん)の治療中は、小柴胡湯(しょうさうとう)を中心とした柴胡剤との併用は避けるべきです。これは間質性肺炎が現れるとの報告があるためです。また甘草を含む製剤と一部の利尿剤などの併用には注意が必要です。これは血清カリウム値が低下し、脱力感・四肢けいれん・まひなどがまれに現れる場合があるからです。服用に際しては、担当の医師または薬剤師にご相談ください。漢方薬には瀉(しゃ)剤と補剤とがあり、瀉剤は身体に入り込んだ不必要なものを追い出すもので、補剤とは身体の不足を補う薬剤です。慎重に身体の状態を観察し、適切な漢方薬を服用することは一向に差し支えありません。反対に漢方薬を服用するからと、病院の薬を急に止めてしまう方がいますが、これは漢方薬の副作用よりも危険を伴うことが多



く、症状の緩和をよく観察しながら必要なくなった薬を医師と相談の上、二つずつ中止していくのが好ましいですね。

**Q** 風邪がこじれ、なかなか元気が出ません。漢方薬をどのくらい服用したら効果が出るのでしょうか？

**A** お年寄りや子ども、または健康であっても寝不足や身体が疲れている時は体力が落ち、病気に対する抵抗力も低下して感冒に罹りやすくなります。風邪を引いても薬をなかなか飲まなかったり、間違った薬を服用すればこじれた風邪に発症します。これは身体に不足を起しているもので虚証といえます。寒がりや毛糸の帽子などをかぶっている方が風邪を引き、いつも眠く、小便が近くなる方には「麻黄附子細辛湯(まおうぶしさいしんとう)」を4~5日服用します。しかし手足が冷たく身体が重だるく頭重し、小便に異常を来して便も軟らかいものには「眞武湯(しんぶとう)」を使用します。この場合は、1~2週間かかることがあります。寝不足や普段の疲労が蓄積されているところに風邪を引くと元気がなくなり少し動いただけで汗をかき、食事の味がしない、また食欲が無くなり夕方になると発熱してくる方には「補中益気湯(ほちゅうえつきとう)」が良いでしょう。この場合は6~7日かかることもあります。このような方は虚証ですので繰り返し風邪を引くことも多く、身体の不足を補う適切な漢方薬を普段から服用することが風邪の予防に

は最も適切な方法です。

**Q** 漢方薬は、どのような病気の人が服用しているのですか？

**A** 漢方は、西洋医学ではよい方法がない、また手こずる難病を治す方法を持つだけでなく、日常的に出会う普通病を治すことにも優れた特質を持っています。そして、漢方がとびきり良く効く疾患というものがあります。一方、両者のどちらも単独では難しく、双方を併用すると効果が上がる疾患というものもあります。

● だるく疲れやすい ● 気力が出ない ● 実際に病院で検査をしたが、異常が認められなかった ● 異常はあったが特に病気とは認められない。これを半健康症候群と呼びます。また、● 胃腸をこわしやす ● 無理出来ない ● 季節の変わり目などに体調が優れない ● 良く風邪を引く ● 夏バテをしやす ● など

は、いわゆる虚弱体質です。五臓に活力を与え、体質を強化する漢方薬を日常から服用することにより、これから来るであろう病気を予防することができます。

婦人科では、● 不妊症 ● 流産 ● 更年期障害 ● のぼせ症 ● 冷え症 ● 生理不順 ● 生理痛 ● 子宮内膜症 ● 嚢腫(のうしゆ) ● つわりなどが挙げられます。一般には血の道症としてよく知られていますが、子宮の環境は微妙なホルモンバランスで調節されています。単なる過不足を補うのではなく、気・血・水の流れを改善し、自分のホルモンを調節する能力を養うことが大切です。

を治す力があることが発見されました。これが薬物の始まりです。中国では、二千年以上前、各集落ごとに子孫に言い伝えられた養生法が『黄帝内経(こうていないけい)』という古典として残っています。漢方における飲食物の種類がここから始まります。その一つは酸苦甘辛鹹(かん)という「五味」です。酸味の多いものは引き締める作用があり、苦味は清熱作用があります。甘味の多いものは足りないものを補い、辛味は発散作用、鹹味の多いものは固いものを軟らかくし、消散する作用があります。また五味は臟腑に入って栄養分となり、酸は肝、辛は肺、苦は心、鹹は腎、甘は脾に分かれていきます。もう一つは、薬物の寒涼温熱という分類です。これを「四気(しき)」といい、飲食物が人体に及ぼす作用をあらわしたものです。食物によって身体を冷やすものと温めるものがあります。従って熱性の病気を治すときには寒涼の薬物を用い、寒性の病気を治すときには温熱の薬物を用います。



お薬に関するご相談は…  
**(社)広島県薬剤師会 おくすり相談電話**  
Tel.082-545-1193 **相談無料**  
◎受付/10:00~15:00(月~金曜日※祝日、お盆休み、年末年始を除く)

薬・たばこなどの誤飲時の応急処置に関するご相談は…  
**(社)広島県薬剤師会 広島中毒119番**  
Tel.082-248-8268 **相談無料**  
またはフリーダイヤル0120-279-119  
(ただしご利用は県内から、一般電話と携帯、PHSのみ有効)  
◎受付/9:00~17:00(月~金曜日※祝日、お盆休み、年末年始を除く)

